

論文 アジアの近代化と日本

中国革命と日本

——中国認識と日本知識人

中嶋嶺雄

●東京外国語大学教授

1 中国の激動と日本知識人

「中国革命と日本」という大きなテーマをここで論じつくすことはあまりにも困難である。従ってここでは日本知識人の中国像を中心に問題を考えてみたい。

わが国の知識人・中国研究者の一部に根強い傾向として、

対象への先行的共感が、とかく科学的認識への志向を回避させてきたことは文化大革命についての評価に顕著であったが、それはなにもいまにはじまったことではなかった。こうしたことの結果として、しばしば中国にたいする情勢分析を誤り、そのたびに自己の見解を恣意的に変更してきている例はあまりにも多い。近い例では、「百花齊放・百家争鳴」の時期の中国にたいする評価からはじまって、反右派闘争、人民公社、「大躍進」政策、中ソ論争などの分析と判断についてもこのよ

うなことがいえよう。激動する中国をフォローすることは、それだけでもなみだいての作業ではないが、しかし、こうした中国の激動のたびに、研究者の提出した意見がめまぐるしく変わっている事例は、私の手許にある資料だけを見ても枚挙にいとまがないのである。知識人の条件として、判断力の確かさと自己の提起した見解への責任がまず要求されるとしたら、これらの点は知識人の主体性を語るうえでの大きな前提問題であろう。

もとより、これら知識人の多くにとつて、その出発点にあつたであろう贖罪の意識は尊重されなければならない。だが、それがいつのまにか対象への拝跪と正当化主義に陥っていったとき、それは、一つには、非科学的認識からくる誤つた情勢分析への蓋然性を導くことによつて、二つには、彼ら自身が「国籍不明化」するために広汎な説得力をもち得なくなるということによつて、まさに贖罪への反逆を結果する。

私はここで、なにか一つの世代意識を、あたかも功績のメダルのように胸にぶらさげて自己主張しようとは思わないが、ここでの問題を考えるにあたって、私のささやかな体験から



『月刊歴史教育』 1979年12月号

三つの感想を提出しておきたい。

一つは、私が一九六六年一月、初めて中国を訪問し、ひとり広州郊外の花県を訪れたときのことであり、その農村の一角に案内され、中国人老婆が語る日本軍の暴虐の例を聞き、老婆の身体に残るその傷痕を見たときの体験にかんじてである。もとより、そのとき私は重い心に閉ざされたのだが、もしも私より一〇代、二〇代、あるいは三〇代上の世代の日本人の人びとがその場面にいたとしたら、その人びとは私とはどこかで大きく違ふ意識に満たされるのではないかと、なにかいらいだしいような、また、私は日本人の中国観にどう決定的な原体験について参与できないのではないかと、いふ疎外感のような、一方また一種の解放感のような気持におそわれたことである。二つは、まさに「めざましい中国」を目撃しつつ育つた世代に属する私は、この花県の農村においてよくいわれるところの、旧中国に對比した生活の向上をではなく、意外なほどの貧困をまず感じたことである。その第三は、花県の農村で私が感じた気持を中国研究という場でおさえてみようと思ひ、日本へ帰つてから調べてみると、中国研究者ないしは中国問題について積極的に発言している知識人の意外に多くが、旧中国に生まれ、あるいは育つたり、そこで仕事についたり、ともかくなんらかのかたちで旧中国と体験的に結びついている人たちであることである。この三つの感想の相互連繫については私の内部でまだ論理化されていない。たんなる、それだけのこともしれない。だが、すでに述べたように、贖罪の問題が結局はわれわれ自身の社会形成への志向と結びつくべきであるのなら、わが国の中国研究者

や知識人の多くは、まず中国に向かつて問題を語りかける以前に、新しい世代に向かつてより多く語りかけるべきだろう。

ところで、このような贖罪感の問題を対象への拝跪におきかえてきた人びとについていま第一に指摘できることは、これらの人びとの情勢分析の誤謬がいまや明白になったことであらう。文化大革命に深刻な党内闘争が内在していることを認めようとせず、文革渦中の上海人民公社のうたかたの成立をもつてしてバリ・コミューンの再現だと主張したりしたのと等々、その後の情勢の発展が次々にこれらの人びとの誤謬を証明していったのである。もとより、これらの人びとのこのような主張は、中国での事態の本質をできるだけ隠蔽し、そのことによつて「衝突緩和装置」を働かせる結果になつていふという意味での貢献があつたのかも知れない。だが、このような作用が、結果的に歴史の進歩にとつて決して有益ではないことは、かつてのスターリン時代の諸問題を想ひ起こすだけで十分であらう。

次に第二の問題は、これらの人びとのあいだに生まれてくる中国観の、奇妙な転換である。つまり、これらの人びとは従来、毛沢東体制を一枚岩的に絶対化し、そこに社会的矛盾や党内闘争を含む政治的危機を決して認めようとはしなかつたのである。ところが、文化大革命によつて、毛沢東体制の実態がついに表面化するに及んで、これらの人びとは、中国における諸矛盾や党組織の形骸化の問題、一貫した党内闘争の存在などを急遽強調しはじめ、しかも、こうした要因を文化大革命の必然性と正当性を意味づける論拠としておおいに活用しはじめたことである。そして、劉少奇批判において彼

が抗日戦争以前からの「反毛・反革命分子」であると毛・林主流派が主張しはじめると、劉少奇が抗日戦争以前からいかに「反革命的」であり、「修正主義的」であったかをこれらの人びとは主張した。かつては劉少奇の論文「共産党員の修養を論ず」がマルクス・レーニン主義にとつていかに貴重な文献であるかを強調してきた人びとが、今度は、この論文がいかに「革命」的、「反マルクス・レーニン主義的」であるかを強調するといった次第であった。ここに、これらの人びとの中国観の奇妙な転換と論理の「すりかえ」があったことはいうまでもない。それはあたかも、中ソ論争が話題になったとき、最初はそれを「反共」宣伝に帰していたにもかかわらず、ひとたび論争が公然化する、一方の側に全面的にコミットすることによって、主体的な中国観、社会主義観の形成を阻害してきたその経過と同様なのである。このような状況を見たとき、われわれにとつては、中国の激動と巨大な変化への主体的な対応という軸から、「四つの現代化」と非毛沢東化の進展という今日の中国の巨大な変化をまともに受けとめ得るだけの中国観を、一日もはやく確立しなければならないであろう。

2 勝海舟の中国観

以上のような日本知識人の中国観との対比において、次に一般には殆んど紹介されていない勝海舟の中国認識をここでとりあげてみよう。

勝海舟が日清戦争にたいしては一貫して非戦論ないしは反戦論の立場に立ち、かえって日清韓三国の提携論を唱えていたことについてはよく知られているところである。

そして海舟は日本が日清戦争の勝利に酔っていた当時もなお依然として、「日本人もあまり戦争に勝つたなどと威張つて居ると、後で大変な目にあふヨ」(「氷川清話」)といいつづけていたのであった。

日清戦争に関連して示された海舟の右のような日清韓三国提携論は、明治維新に際し、「一国不和を生ずれば其国滅亡すべし」との国家的使命観に立脚して朝鮮相撃ちて国滅びることを回避せしめた彼自身の体験に照らし、欧米列強のアジア進出をまに日清両国が相撃つことの愚を避けようとした戦略論的構想に基づくものだったといえなくはないであろう。だが、海舟自身の言論に即して述べるならば、そこには、きわめてユニークで着実な中国認識が前提にあった。

「支那人は、一国の天子を、差配人同様に見ているヨ。地主にさへ損害がなければ、差配人はいくら代つても、少しも構はないのだ。……二戦三戦の勝をもつて支那を軽蔑するは、支那を知る者にあらず。」

「支那人は、天子が代らうが、戦争に負けうが、殆んど馬耳東風で、はあ天子が代つたのか、はあ日本が勝つたのか、などいつて平気である。……一つの帝室が亡んで、他の帝室が代らうが、国が亡んで、他国の領分にならうが、一体の社会は、依然として旧態を存して居るのだからノ。社会といふものは、国家の興亡には少しも関係しないヨ。」(「氷川清話」)

たしかに、海舟は明治中期の日本において、今日流にいえば、いわゆる親中国派だったのかもしれない。正確にいえば海舟の支那は清を意味し、清にそつこん惚れこんでいたよう

で、「清の太祖は、千古の偉人だ。あんな傑物は、いづれの世にもあるまいヨ。」とまで語っている。だから、清の宰相・李鴻章、海軍提督・丁汝昌などとは親しく、彼らをかきわめて高く評価しているのにならして、反清の旗手・孫文については「陳白がよく、連れて来ますから一度逢つてやつてくれと言ふが、忙しいからね。」とだけ述べ、改良派の康有為や梁啓超にかんしては、「日本に倣つて立憲政体を布き、日本の援助によりて支那の改革を謀ると言つたから、大層怒鳴つてやつたよ。」元米支那人でありながら、支那の長所を知らぬといふ奴があるか。現今の支那はすなはち堯舜の政治で、日本の立憲政治など真似るといふペラポーな事はない。……」と言つてやつた。」とさえ語っている。このような清へのシンパシーの底には、しかし、情熱的な海舟の胸中秘かに宿つていた、中国という悠久の伝統世界への静止的認識があつたのであろう。そして、文明の農業性に根づいた中国社会の不易の性格をその本質的なところで深くとらえていたがゆえに、中国にかんし、「社会といふものは、国家の興亡には少しも関係しないヨ」とまでズバリといきれたのであろう。

こうした海舟の中国認識の真髓は次の言葉に集約されている。

「全体、支那を日本と同じやうに見るのが大違ひだ。日本は立派な国家だけれども、支那は国家ではない。あれはたゞ、人民の社会だ。政府などはどうなつても構はない、自分さへ利益を得れば、それで支那人は満足するんだ。」

(「氷川清話」)

この表現のなかには、まさに「帝力、いすくんぞ我にあらんや」といわれる『十八史略』以来の中国人の政治意識が美事に

とらえられており、「支那は国家ではない。あれはたゞ、人民の社会だ」と看做す中国こそ、中国革命を達成した毛沢東体制において、毛沢東自身がいくたびか挑戦して捕捉しきれないでいた中国社会の茫洋とした柔構造とその密教的性格を衝く本物の認識であるといえよう。

海舟のこのような中国像を、だから、いわゆるアジア主義として一括することには無理があらう。海舟の『朝鮮清提携論』や中国像には、のちのアジア主義者たち（樽井藤吉や大井憲太郎ら）のアジア連帯観や玄洋社流の大アジア主義のように、孫文の革命と結んだある種の使命観ないしはラディカリズムの影はなく、また、閩倉天心のような直情的アジア主義とも異なっている。

その中国認識は、清の政治家たちとの海舟自身の交流によつて体得されたものであると同時に、おそらく、海舟が「おれは、今までに天下で恐ろしいものを二人見たそれは、横井小楠と西郷南洲」と述べて西郷と並べて畏敬していた横井小楠の中国認識の影響を受けているのではないかと思われる。小楠は、「堯舜孔子の道を明かにし、西洋器械の術を尽くす」、つまり東洋道理と米欧文明の融合のなかに日本の進路を見出そうとしたが、同時に日中兩國が「督餉輔車」の関係にあることを力説し、アヘン戦争以来の中国の衰退に目を奪われて中国軽視——西洋重視の方向へ大きく動いていった幕末の知識人たちのなかではきわめてユニークな存在であつた。

ところで、閩倉のように福沢諭吉の「脱亜論」は、その短い政論的メモであつたにもかかわらず、そのような幕末以来の明治知識人の移ろいゆくアジア認識、中国認識を背景にして

出現したものであった。論吉は、「脱亜」のなかに文明日本の方向を定めようとしたのだが、一方、日本海軍の生みの親として日本の開明化に心血を注いだ海舟が最後に辿り着いた地点こそ「入亜」であったのだとしたら、海舟と論吉の対照はいよいよ鮮やかになる。

論吉は「瘡我慢の説」において海舟を批判し、海舟はそれについて「行蔵は我に存す。毀譽は他人の主張、我に与らずと存候」と答えたのだが、この論吉と海舟の論戦の背景に中国認識の差異を軸にした「脱亜」と「入亜」の論争がかくされていたとみることもできなくはない。

これまで、アジア主義について書かれたものには、こうしたことか、海舟のアジア認識ないしは中国像についての言及は一切ない。海舟の中国についての言説は隠遁者の随感にかすぎないと看做されたのであろうか。

やがて海舟が没する明治三〇年代になると、日本はすでに論吉の「脱亜論」の道を現実のものとしていったが、同時にこのような現実とは、いつの日か海舟の中国認識の深い奥行きを再評価すべきときが訪れることを秘やかに示唆しはじめていたのである。

やはり海舟のこのようにしたたかな認識については、これまでほとんど見逃されてきたのだといわざるを得ないようである。

3 日中関係と中国像

中国は今日、巨大な旋回を遂げつつ蠕いている。私は、いま中国の旋回といったが、一般にはこのような中

国の旋回が十分に認識されないうまま、日中関係のいわば伝統的な枠組のなかでのみ問題が考えられているように思われる。

ところで、日中関係の基本的な性格を「同文同種」と見做す見解にたいして、私はかねてからその危険を指摘し、むしろ「異母兄弟」としての位相において問題を考えることの必要を説いてきたつもりである。いま、ここでこの問題については、これ以上立ち入らないが、いかに日中関係の重要性を強調するにせよ、日中両国のあいだには、歴史的にも、現状においても、いわば宿命的に著しい非対称性があることを、われわれはつねに認識していなければならぬ。

そのことへの緊張感を欠いて、あるいは「同文同種」という特性に甘えて中国を考えることが、むしろ中国認識における誤謬をしばしばもたらしてきたのであった。そして、わが国に固有な「対中国シンパシー」という情緒的なモメントが、科学的・客観的な中国認識を阻害するがゆえに、結果として主体的な中国像を確立し得なくする大きな要因であることにについては、先に指摘した。そのような「対中国シンパシー」を禁欲することがもたらす精神の彫琢を経ずして、ひたすら中国と一体化しようとし、その結果、中国の政治的变化につねに追従したり、あるいは変化に動じて中国を正視し得なくなるというような中国観が氾濫してきたことについても右に見た通りである。

このことに加えて、ここで同時に指摘しなければならぬことは、文化大革命・中ソ対立さらには「大躍進」政策と遡及することは、現代中国にたいするイメージのいかんが、私たち個々人の世界認識ないしは思想のありようを映し

出す鏡でもあったために、その鏡に映し出されるつかのまの自己像に陶醉して、いわば観念の遊戯のなかへ中国を「我田引水」することが、わが国の知識人のあいだで、きわめて頻繁であったことである。文化大革命に「毛沢東思想の世界的意味」を見出し、「歴史の壮大な実験」を夢見た人びとは、それがイデオロギー的・党派的な共感であったにせよ、革命的エクスタシーないしは「コミュニオン国家」の幻影への陶醉であったにせよ、ナロードニキ的土着主義を錯覚したものであったにせよ、はたまたマックス・ウェーバーの宗教社会学からのカリカチュアであったにせよ、いずれも観念的な自己像の反映ないしは願望としての中国像を砂上に描いたにすぎなかったのであり、いずれも当の中国の社会的現実や政治文化そして中国民衆の意識なり、苦悩なり、また「体臭」なりとはまったく乖離したものであったといえよう。

だが、想えば中国の激動は、わが国知識人にとつて、つねにそのような自己像を映し出す鏡でもあると同時に、わが国の知識人は、中国の変革に賭けることによつて、しばしば自己を救済しようとしてきたのであった。かつて一九四九年夏、まさに中国革命の最後の勝利を目前にしつつも、中国の将来への展望がいまだ定かでなかったとき、雑誌「世界」は「中国の現状をどうみるか——シナ學者のこたえ——」という注目すべき特集を試みたことがあった（「世界」昭和二十四年八月号）。

仁井田隆、吉川幸次郎、貝塚茂樹氏ら中国学の泰斗、碩学にまじつて、東洋文化研究所の所員であった松本善海氏は「中國の苦悶と中國研究者の苦悶」と題するユニークなエッセーを寄せ、問題を次のように語っている。すなわち松本氏は、中

国の巨大な変革を直視しようとなし、中国認識がわが国には依然として存在する一方、これとは反対に、發展の途上における飛躍ではなくして、そこにははつきりとした歴史の斷絶でも存するかのような調子で、中國の變革を説く人たちがあつたと語り、「現實の日本の情勢に敗戦後の希望をうち碎かれた思いのする人たちのうちには、さきとは逆に、その希望を中國の變革にかける。やがてわれわれの救いは、解放せられた中國より来るに違ひないと。かくして「中共」なることばは、インテリのユートピアにまで高められる」と指摘していた。松本氏がはやくもこのとき鋭く描き出していた中国認識の病理が、過般の文化大革命を迎えて、まさに熱病となつたことについてはわれわれの記憶にも新しい。

いずれにせよ、これらの熱病にたいし、中国認識における積年の宿癩にたいして、われわれはまだ十分な免疫体を形成し得ていないのである。そのような中国認識における弱さが、中国の現状の把握のみならず、その対外政策や世界戦略についての認識を恣意的なものにし、ひいては日中關係を一つの國際關係として見る視座を曇らせてしまつてゐる。というよりは、日中關係を一つの國際關係としては、ほとんど看做してこなかつたのではなからうか。昨夏の日中平和友好条約の締結もこの点では例外でなく、その結果、八〇年代の日本外交は、この条約がもたらす國際政治上の代償に悩まねばならないであらう。

（なかじま・みねお）